

老人
若者

老人 いま、何時だ？

若者 さっき3時になったばかりです。

老人 ああ、3時か。

若者 ええ。

老人 長く生きていると、今がいつだったか、自分が今どこにいるのか分からなくなってくる。日のかげりを見て、自分がいまどこにいるのか、はっと気づかされる。ああ、そういえば、さっき飯を食ったばかりだ……。時間の感覚がなくなってくる。

老人 残り少ない人生をどう生きるか？強く美しく、短い時間に見合った生き方をできるものもいるだろう。でも、最後まで、ありたい自分を求めて、にもかかわらず、ズレて、ズレながら、生きるものもいるだろう。

老人 私たちは生を離せない。そう、どこかで期待する。生きつづけることを、どこかで期待する。一瞬が永遠となることを。体が、しんどい、だるい、つらいということとは違う。そうした痛みという感覚を超えて、私がいるはずの場所に、別の自分を見る。今までの私とは異なる、もっと新しい何かを、もっと進んだ何かを。

若者 そうですか。

老人 ずっと休んでいると、色々考える時間だけはたくさんある。

若者 ええ。

老人 お前はこれから何がしたい？

若者 ……お芝居、ですかね。

老人 それで、飯を食っていくのか？

若者 ええ……。できれば、細々でも……。

老人 そうか。

老人 あいつは、動物が好きだった。

老人 あいつは、みっともないことにならないように厳しくしつけた。でも、そんなこと、

何にもならなかった。言うことを聞かせようとすればするほど、言うことを聞かなくなる。それで殻に閉じこもってしまった。永遠のような時間だった。何をいっても響かない。あいつは、ほうぼうで悪さをした。私が、みっともないことになった。けれど、あいつのことを思って、謝ってまわった。そのとき、私はあいつの代わりになって立っているんだ、ということに気がついたんだ。そして、初めて、あいつのことが知りたい、という思いに至ったことに気づいた。私は、あいつになり、あいつは私になるんだ、と。そこで、私は怒ることをやめ、率直にあいつに何がしたいか聞いた。そうしたら、牛が好きだと白状した。

老人 いつか牛を育てたいと言っていた。

若者 ええ。

老人 死んだ人間のことばかり思い出す。思い出しては語って、語っては思い出す。

若者 悲しいですね。

老人 ああ。

(老人、遠い山なみを見て)

老人 かつて兄が言っていた。いつか、災いが起こる。いつか、大変なことが起こる。しかし、人々は気づかないだろう。私たちは気づかないだろう。

若者 予言だったのですか？

老人 いや、気づく人間は、気づいていたんだ。見えているものを見ないようにしていただけなんだ。

若者 おろかですね。

老人 ああ、大半のものはおろかなまま生きて死ぬ。けれど、どこかで目を覚ますものもある。それが、いつかは分からない。ひょっとすれば、死ぬ間際かもしれない。そのことを私は信じているんだ、奇跡的なひらめきを。

老人 しかし、牛が好きである、ということが大事なんだ。隠す必要はない、私たちのもっている、言葉にならない、どうしようなく偏愛していることを。つまり、直感を信ずることだ。もしも、私たちが失っていることがあるとしたら、どう生きようとするかということではなく、私たちに向かって問いかけるといふことかもしれない。生に執着するのをあきらめて、静かになくなる道があっても、どうしたって生にすがって、現世の利を求めようとする。それが、よく分からないのだが。私の人生は、これからの時間が、厳密に、ほとんど決まっている。終わりを告げられたものは、残された時間のなかで、自らに問いつづけるしかないのだ。

老人 いま、何時だ？

若者 3時と、5分です。

老人 そうか。進んだと思ったら、遅れている。遅れると思ったら進んでいる。不規則な時計のようだ。